

石川・木^{きの}ノ新保遺跡

- 1 所在地 石川県金沢市木ノ新保町・北安江町
- 2 調査期間 一九九三年(平5)四月～十二月
- 3 発掘機関 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 栃木英道・楠 正勝・滝川重徳
- 5 遺跡の種類 城下町跡・集落跡・墓地
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(金 沢)

木ノ新保遺跡は、金沢市域の北西部に位置し、小立野台地から延びる微高地の先端部を占めている。標高は約8mで、現在はJR金

沢駅の構内となっている。

発掘調査は、北陸新幹線金沢駅緊急整備事業に伴って実施したもので、近世の墓・道路・建物などを確認した。遺跡の存続時期は一七世紀から一九世紀までで、一七世紀初頭に結桶を埋納容器とする墓地が営まれ、

一七世紀後半以降は武士の居住域となっている。

居住域では、道路・掘立柱建物・井戸などが確認されている。また、この居住域に接して、結桶を埋設した貯蔵遺構が検出されており、城下の屎尿集積遺構と推定される。金沢城下町の西北端において、城下の境界域の様相を知り得る遺跡である。

木簡は、墓から五点、溝から五点、土坑から六点、落ち込み状遺構から二点のほか、包含層から五点、計三十三点出土した。

なお、木ノ新保遺跡の発掘調査は、この後一九九四年から一九九七年にかけて金沢市教育委員会が実施しており、約八〇点の木簡が出土している(本誌第二八号)。

8 木簡の积文・内容

八号墓

- (1) 「上木ノ新保町
諸白」

底390×厚23 061

一六号墓

- (2) 「□□成仏」(側板)

底径40×高(513) 061

- (3) ・「角行」

・「龍馬」

30×29×10 061

一九号墓

(4) a・
 成
 皆具
 仏
 (蓋板)

径640×厚12 061

(4) b・
 前
 (側板)

・
 後
 (側板)

・
 〔
 (側板)

底径55×高762 061

二三号墓

(5) a
 正
 (蓋板)

径274×厚8 061

(5) b・
 前
 (側板)

・
 後
 (側板)

径268×高248×厚2 061

溝SD〇五

(6)
 〔
 〕

178×37×5 051

(7) 吉田
 九郎
 〔
 〕

(91)×25×6 061

(8) 鱈切漬
 〔
 〕

径130×厚7 061

溝SD二七

(9) 進上
 煮大豆
 宝久寺
 〔
 〕

径121×厚3 061

(10) 納豆
 〔
 〕

径132×厚4 061

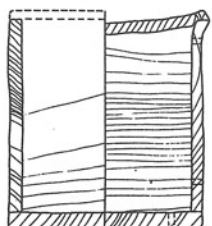
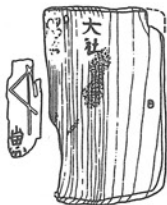
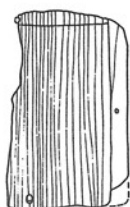
土坑SK一〇四

(11) 三田村左京
 高橋
 〔
 〕

231×37×3 061

(12) 三之内
 〔
 〕

172×116×8 061



(15)

土坑SK-108

(13)

破[・]追[「]破[」]魔[「]力[」]
 破[□]追[□]魔[□]力[□]
 破[□]追[□]魔[□]力[□]
 (蓋外面)

「乾」(蓋内面)

「坤」(外底面)

「北子亥」
「(側面c)」

東辰卯寅
「
」
(側面b)

「巳午未」
(側面 a)

「
申酉戌
」
(側面d)

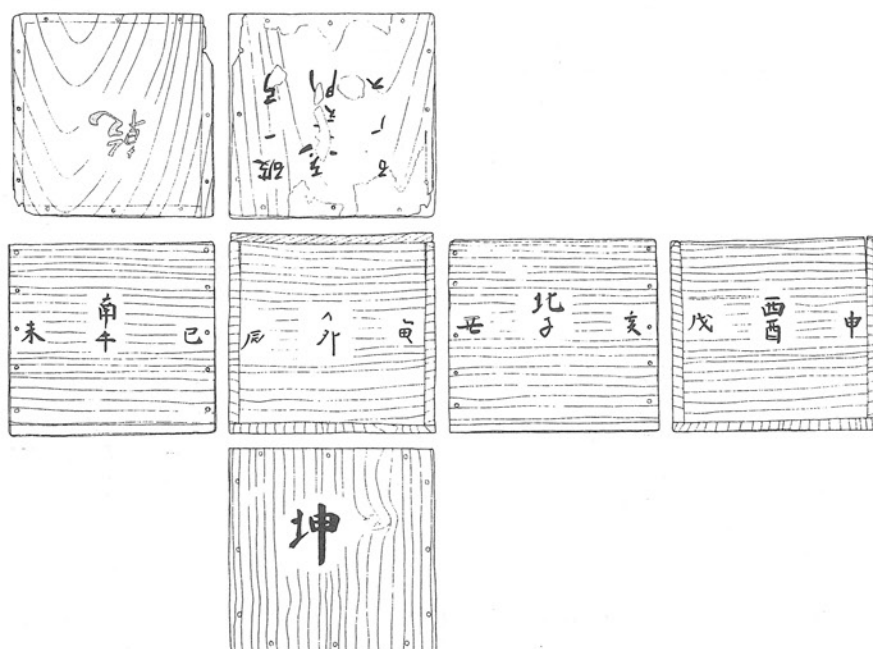
土坑SK—三一

(14)

「進上
浜納豆
円乗寺

縦152×横152×高152 061

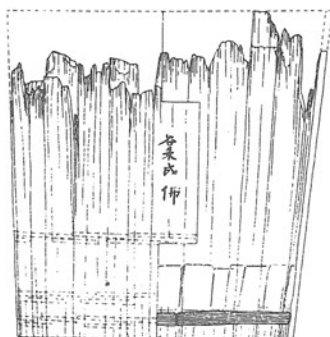
徑135×厚3 061



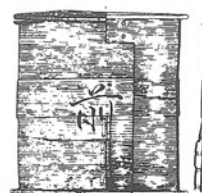
(13)



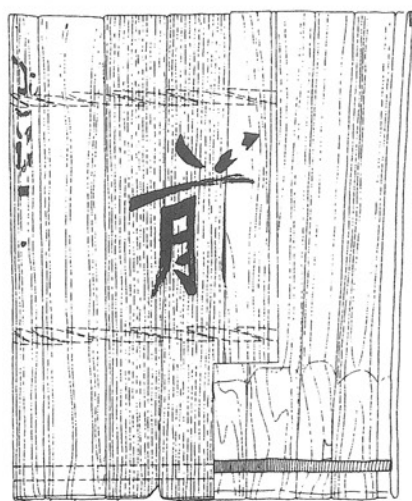
(1)



(2)



(5)



(4)



土坑SK一四四

(15) ・「大社」

・「□×」

縦86×横96×高98 061

土坑SK一八九

(16) 浜納×
妙典×

径148×厚4 061

落ち込み状遺構SX〇二

(17) 「十七」

径42×高36 061

落ち込み状遺構SX〇四

(18) 浜納豆

径132×厚5 061

包含層

(19) ・「大」
(焼印)

・「△」

47×33×4 021

(20) ・「大」
(焼印)

・「△」

46×32×4 021

(21) 「明和□□」

80×18×2 011

(22) 「進上
鯨

大國□□太夫」

径127×厚5 061

(23) 浜□×
〔納カ〕

径145×厚4 061

(1)は、埋納容器に転用された酒樽の蓋である。(2)は早桶で、側板に墨書されている。(4)は、早桶の側板に大きく遺骸の向きを示すと思われる「前」「後」の文字が見える。蓋板にも墨書が見える。(5)は曲物で、乳児の埋納容器であろう。

(8)(9)(10)(14)(16)(18)(22)はいずれも曲物の蓋に内容物の名を記したものである。進物用の容器とみられ、鱈切漬、煮大豆、浜納豆の名が見える。浜納豆は、近世においてもっぱら寺院で製造された塩辛納豆で、年始の挨拶に小型の曲物に入れて檀越に贈られた。金沢城下町では、このような曲物の蓋が九遺跡から計三六点出土している。

(15)は、土坑に埋置されていた蓋付きの箱である。一辺一五二mmの立方体で、側面、外底と蓋の内外面に墨書が見える。箱の中には砂が中程まで入っており、砂の上に土師器皿に乗せた鉄地金張の球が置かれていた。地鎮に関わる遺物とみられる。

9 関係文献

石川県教育委員会・財)石川県埋蔵文化財センター『金沢市木ノ新保遺跡』(二〇〇二年)

(三浦純夫)